The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヘーゲル哲学史に於ける論理と歴史
Author(s)	西羽, 義夫
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1974, 7, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヘーゲル哲学史に於ける論理と歴史

西羽義夫

(一)ヘーゲル『哲学史講義』[1]成立の背景

ヘーゲルは哲学史の講義を九度繰り返し、その期間はイェーナ後期の一八〇五年から彼の死の直前にまで及んでいるが、ヘーゲル自身が哲学史の著書を出したことはない。ヘーゲルは出版のため自身の講義ノートを推敲していたと言われるが[2]、十度目の講義中に襲われたコレラのためそれも不可能になったようである。現在各種の全集に収められている『哲学史講義』は、ヘーゲルの没後弟子達がイェーナ大学等でのヘーゲルの講義原稿と自分達の筆記ノートを合わせたものであるが、その編者によれば、ヘーゲルは後の講義になればなるほどイェーナ期の原稿に帰って行ったと言われる所[3]から見て、ヘーゲル自身の著書に比べてその思想を忠実に伝えていないとは考えられない。しかしその『講義』の編集の仕方から見れば細部について不明確な点が残るようである。全集版の編者ミシュレやローゼンクランツの見解によれば、哲学史全体の骨骼はイェーナ時代に既に出来上っていたと言われるが[4]、この時期にはヘーゲルの最初の哲学的著書であり、ヘーゲル哲学の全貌を雄渾な筆致で示す『精神現象学』が刊行されており、過去「二五〇〇年」の哲学史とその掉尾を飾るべき自己の哲学が両々確立されようとしていた。こうした事

情はヘーゲル哲学史に於ける論理と歴史との関係を解明する鍵を与えている。小論では、この哲学史に於ける論理と歴史及び両者の関係について注意を向けて行きたい。

(二) 哲学史の地位

哲学史という哲学の一領域に対する評価が高まったのはヘーゲル以降優れた哲学史家が陸続したためであり、ヘーゲル以前にはその地位は低いものであった。当時、ヘーゲルに依れば、哲学史は諸哲学者の「意見」の枚挙としての「意見の画廊」乃至侮蔑的に「阿呆の画廊」、「昏迷の画廊」[1]と看做されていた。ここで言う「意見」Meinung なるものはヘーゲルによれば私的なものであり、個々の哲学者により相違するのは勿論、対立矛盾することも屢々であるから、哲学史は相戦う騎士の「武勇伝」[2]あるいは「ただ死者の屍で蔽われた戦場」[3]とも見られ、全く哲学の努力の空しさのみを証明するに過ぎないものとなる。こうした理解のされ方によっては哲学は空しいのみならず、雑多な意見の中で自己の規定（使命）を見失ってしまう。

ヘーゲルは右のような「通俗的見解」を顚倒し、哲学史を「思惟的理性の英雄達の画廊」[4]、「神像をまつるパンテオン」[5]、「絶対者に関する発見の歴史」[6]として高く評価する。また諸々の哲学の多様性や対立といった、通俗的見解を混乱させる事態をも哲学史にとって「本質的な」、「必然的な」[7]規定と把握し、多様性、特殊性を嫌い、統一性、普遍性に固執する屁理屈屋を、様々な果実を果物（果実そのもの）ではないとして食べない病人にたとえている。無論ヘーゲルも通俗的見解と同様、「真理は唯一である」という「理性の本能」に基づく「克服し難い信仰」[8]を出発点としているのであるが、更に進んで、真理という唯一の源泉から多様な万物が生成するのを論証してみせることを

自己の課題としているのである。

(三) 哲学史の概念

哲学史は以上の如く「神殿」や「英雄達の画廊」と比喩的に述べられたが、これから判るように、哲学史は、プラトン的表現では、主観的な意見臆見 doxa の集積ではなく、知識 episteme の体系としてそれ自身学問的であり、哲学という学問にすらなること、より端的には、「哲学史の研究こそ即ち哲学そのものの研究である」ことが主張されている。そしてこの命題の解明を以下で行ってみたい。[1]

先ず、哲学史という概念は「内的矛盾」[2]をはらむと言われる。「哲学」と「歴史」とは、一方が永遠不変の必然的真理を対象とするのに対し、他方は偶然的な個々の出来事を対象とすると考えられるが故に相矛盾すると言われ、哲学を歴史の場で把えるとは必然的なものを偶然的なものに変質させてしまうと考えられるのである。実際に哲学史がこのような矛盾を含んでいるとすれば学問としての哲学史は瓦解するはずであろうが、ヘーゲルは矛盾を理論体系から排除する悟性的立場にあるのではなく、寧ろ矛盾を積極的に摂取するというか、矛盾こそ理論形成の原動力としている。[3]相矛盾するものを包蔵しつつ、それを自己の不可欠の構成要素として止揚しながら自己を維持発展する所にヘーゲル哲学は成立するのである。従ってヘーゲル哲学史は一つの「応用論理学」として、単に歴史を境位とするのみではなく、歴史そのものを哲学の境位に於いて把握することにより学問（哲学）として成立するものであり、哲学史とは正確には「哲学史の哲学」[4]である。哲学史理解のためには、ヘーゲルも言うように、[5]第一に哲学そのものの定義が明らかにされねばならない。『講義』の「結論」では、哲学とは「不変に、永遠に、即且対自的

に存在するものの認識[6]、「普遍的内容として全ゆる存在である思想[7]」、「具体者の発展の認識[8]」等と規定されているが、最後の規定について詳しく解説されているため、これに依って哲学、哲学史の概念を示したい。

「発展」という術語には小論の観点からすると時間的発展と論理的発展とが考えられ、前者が歴史、後者が哲学（論理）に該当する。

（イ）時間的発展について　哲学の時間的発展（歴史）については「内的歴史」と「外的歴史[9]」とが区別され、「内的歴史」とは「哲学の内容そのもの」の歴史であり、「外的歴史」とは哲学者個人や諸学派の興隆衰退といった外面的事実の歴史であると規定されていて、ヘーゲルは『講義』の本文で「外的歴史」を「内的歴史」に先行させている。「内的歴史」、「外的歴史」を時間論の問題として考えてみるとこの哲学史に於ける歴史性の意味が明確化され得ると言える。ヘーゲルが時間論を集中的に展開しているのは『エンチュクロペディー』の「自然哲学」の冒頭であるが、ここに於いても先の内的、外的歴史に対応する二つの時間が説かれている。「自然哲学」とは哲学体系の中で「他在〔本来の姿を失った姿〕に於ける理念の学[10]」（〔　〕内は訳者による）と呼ばれるように、理念の疎外態としての自然を対象としている。ヘーゲル哲学とは要するに理念が自己自身であるものになる過程の叙述であるが、単純な自己同一的な思惟としての理念は自己自身となるために自己を自己に対峙させ、然る後にこの対立を和解させる。自然とはこの自己（有限的精神）に対峙させられた自己のことである。

こうした自然の中の最初の範疇の契機としての時間は疎外態として、「空間の真理[11]」であるにも拘らず、「今[12]」Jetzt の連続たる直線的悪無限的空間的な時間、表象的時間に留まる。この「自然的時間」が上述の「外的歴史」に対応するが、ヘーゲルは時間を単にこのような消極的意味で把えていたのではなく、表象的時間に対する概念的

時間、真無限的時間をも論じており、力点は寧ろこちらにあるのである。これは「自然的時間」に於ける過去、現在、未来という通俗的区別を越え、通俗的時間を根絶した非時間的なものである。「真の時間」[13]にみられるのは、従って、「絶体的現在」[14]、「永遠的現在」[15]であって、これが「内的歴史」に対応する。「自然的時間」がこの真の時間を表象的に固定した所産であり、これを根拠として持っているように、「外的歴史」は「内的歴史」を根拠としていると言える。学問の内容の発展としての「内的歴史」と概念的時間の対応は、「定在する概念」としての「時間は自己の内に於いて完成されていない精神の運命として必然性として現われる」[16]という命題によって示されよう。このような概念的時間は「自然哲学」の本文で述べられているのではなく、その注釈や補遺に於いてであるように、ヘーゲル哲学の論理的発展と不可分である。

（ロ）論理的発展について　『講義』の中で発展として論じられているのはこの論理的発展であるが、これはその主体たる「具体者」と切り離し得ない。「発展」とはアリストテレスの運動論に倣って、即自在（素質）Ansichsein、可能態potentia、潜勢dynamisから対自在（自覚態）[18]Fürsichsein、現実態actus、現勢energeiaへと移ることとされるが、この表現だけでは「発展」の意味が十分把えられ得ないので、ヘーゲルは後で補足しつつ説明している。「発展」とは、それに依れば、普通図式的に弁証法の形式とされる即自―対自―即且対自（傍自bei sich）[19]の三段階として示される。植物や人間がその具体例として用いられているように、この発展は有機体的生物的発展と看做され、発展の過程も当然目的論的に考察されているのであって、発展の目的とは自己自身へ再び還帰することであり、自己開示即自己還帰という円環的発展が重要な意味を持っている。

次に、生物的実例で示される発展の主体たる「具体者」とは即自在と対自在という区別された契機の統一[20]と規定

されているが、所謂理念、正確には精神のことである。ヘーゲル哲学は、上述のように、静的な原理（始元）ではなく矛盾を核とする動的原理に基づくものであり、発展を欠く具体者とはそれこそ抽象的産物である以上、具体者の発展が第一義的に解明されねばならないが、最も基本的な形で示せば以下のようになろう。具体者はその本性上、即自的であっても既に区別された、あるいは対立した諸契機を自己の内に統一的に含んでいるのであるが、この区別、対立はまだ明確な形では措定されていない。こうした統一と対立という「矛盾」が対立した諸契機を含蓄的な状態から顕現させるのである。これが即自から対自への移行であるが、しかし区別や対立乃至矛盾の状態にある契機が顕在化して元の統一が失われてしまえば発展の過程は挫折をきたす。真の発展とは対立矛盾する契機の抗争により統一が危機に直面しながらも、寧ろそのことを通して対立する存在が全体へと止揚されることにより元の統一が回復され、完現態が実現されることにある。これが対自から即且対自への移り行きであり、「具体者」とは以上の過程の全体である。発展の成果が本来の自己の確立である以上、発展過程は、光源から発せられた光が外へ拡散しつつも自己の外部に出ることがないように、外に向っているのではなく、自己の内に向っているのである。この成果としての「具体者」は論理的必然性により自己を展開しつつも他に依存することなく、契機の各々に自己を刻印しつつ自己自身のもとにあるbei sich selbstが故に自由であって、必然性と自由とが「具体者」の主要な契機である。[21]

こうした論理的展開をヘーゲルの『エンチュクロペディー』の体系（狭義の体系）に於ける諸哲学との関連で見れば、「自然哲学」は対自在、疎外態にあたり、「論理学」、「精神哲学」は夫々即自在、即且対自在に該当すると言えようが、正確には論理学こそ学の円環の端初にして成果であり、即自的にして即且対自的段階を占め、ヘーゲル哲学の中枢的学問であって、その他の哲学的諸学問は「応用論理学」[22]とも称せられるのである。

以上「発展」について時間的側面、論理的側面を見て来たのであるが、前者に関し世界史との繋り、後者について学（問）としての哲学の問題に立ち入ってみたい。

（四）歴史としての哲学史

哲学史は歴史として世界史と如何なる関係を持つのか、これが問題である。ヘーゲルは哲学史成立の根拠として、「理念はそれ自身の内で定有へそして外面性へと思惟の境地に於いて入り込む。従って純粋哲学は思惟に於いて時間の中で前進する現存在として現象する」[1]と述べているが、「この定有と時間内存在[2]とは有限な個別的意識一般（即ち個々の哲学者）の契機であると共に哲学的理念の発展の契機でもある」[3]と規定されており、個々人の哲学者の営為が理念発展の特定の段階に照応することが示されている。個々の哲学者は特定の時代、民族に帰属しているから、世界史の主体たる世界精神の「荷負い手」としての民族や時代の精神に浸透されつつ、これを思惟に於いて最も純粋に把握しており、このことから「哲学史は世界史の核心である」[4]と主張されるのである。

（五）学としての哲学史

ヘーゲル哲学はヘーゲルの年少時からの歴史的関心の強さを反映して歴史性というものを自己の特質として持ち、この歴史的関心と学的要求とが相俟って哲学史という領域を学（即哲学）として成立させたが、こうした経緯は、上述のように、哲学史と哲学の間に密接不可分の連関を持たせている。「神の生命と時間的になされるすべてのものとは精神が自己を認識し、自己自身を自己の対象とし、自己を見い出し、自己自身を自覚し、自己を自己と結合

することに向っての努力に他ならない」[1]という命題は、『大論理学』の「緒論」で論理学が「永遠の実在にある神の叙述」[2]と示されていて、時間的なものに哲学史も含まれることを考えれば、論理学、哲学と哲学史の目的と規定とが全く同一であることを明示している。更に、「歴史に於ける諸々の哲学体系の継起の順序は諸々の概念規定の論理的展開に於ける理念の継起の順序と同一である」[3]という著名な、しかしやや独断的な主張も提示されている。

ここで、学は円環的であり、歴史が直線的であるとすれば、他の諸科学のような端初を持たない円が如何に直線へと開かれ得るのかという疑問が生ずるが、これに対して哲学（及び哲学史）の端初は哲学する主観に関係し、哲学そのものとは関係を持たないと言われている。[4]しかし、哲学の端初はこのように主観的任意なものに過ぎないのではなく、直接的と見える端初も実は成果により媒介されたものとして最後に決定されるべき必然性を有しており、諸科学に於ける端初の主観性と、哲学に於けるその客観性、必然性という二側面は哲学史の始まりの問題に影響を及ぼす。また、哲学史で扱われる内容は、先に述べたように、「内的歴史」に属するものとして概念的時間に於ける「現在」[5]Gegenwart の相で叙述されるのであり、「外的歴史」に於けるような過去の死物と論じられるのではない。しかし、論理と歴史との相即不離の関係についてヘーゲルは留保条件をつけ、両者は必ずしも照応し合うものではないと断っているが、『講義』での取り扱いは統一を欠くように思われる。[6]

（六）哲学史の構成及びその問題

ヘーゲル哲学史の根本問題は、先述のように歴史（世界史）発展の導きの糸たる自由と必然性にあると共に、『エンチュクロペディー』の「予備概念」で一貫して見られるように、哲学として、思惟と存在との一致にあり、哲学史

はこれの問題史とも考えられる。哲学史発展の原型を示すべき論理学の中心課題は、広くは、思惟と存在との一致の問題、より正確には神の存在証明[1]の問題、「弁神論」[2]であるが、こうした姿勢の背景としてはカントの批判主義に見られる二元論が挙げられる。[3]

右の留保条件について遂一『講義』の本文を検討するということは浅学のため不可能であるため、「緒論」や「結論」で示される事柄について小論の課題を果して行きたい。

哲学史の全体は基本的にはギリシャ哲学とゲルマン哲学に二分され、後者は「キリスト教内部の哲学」として中世哲学を前段階とする。この二つの哲学は夫々「理念の展開」、「精神の展開」[4]と規定されていて、今迄同義のものとして来た理念と精神との相違が二つの哲学の違いを生んでいる。理念の展開としてのギリシャ哲学とは具体者に含まれる諸規定が「即自的に」、「観念的に」展開され統一を得るという過程を示していてまだ単純である。つまりまだ思惟と存在との対立を考慮に入れず、パルメニデスのように思惟はまた存在でもあるという無意識的な前提から出発していると述べられているのであるが、単純であるからこそ論理的展開の典型として三角柱の比喩を用いて描出され得たとも言えるのではないか。

近代のキリスト教的ゲルマン哲学が精神の展開であるというのは、それが、具体者に含まれている諸契機が実在性を得て独立し且つ夫々が相互に全体性を獲得しつつ止揚されて真の具体者を構成する過程を示しているからである。また「キリスト教的」と断わられるのは主体としての理念たる精神が普遍者、具体者となるという思想がキリスト教世界で初めて興ったと看做されているからであるが、ただ精神が「思弁的理念」[5]とも呼ばれているように、理念と精神とは全く別のものではなく、より高い規定をうけた理念が精神であると考えられる。兎も角、この近代

哲学に於いて初めて思惟と存在、主観と客観、人間と神、自由と必然、善と悪という問題連関が真に脚光を浴びるに至ったと述べられている。ただこの近代哲学の百花繚乱の歴史はヘーゲルの論理的枠をはみ出し、ギリシャ哲学史に見られる整然たる体系的構成は影をひそめている。またこのギリシャ哲学史に於ける論理と歴史との対応関係についても議論の余地があり、例えば、論理学冒頭の有無成のトリアーデについてそれに対応すると言われるパルメニデス、仏教、ヘラクレイトス[6]の時代的先後関係、学的内容の妥当性はよく問題になるが、これについて管見を示したい。

ヘーゲルは上述のように、「外的歴史」と「内的歴史」とを区別しているが、『講義』で論じられているのは両者の総合乃至混淆であり、叙述されている内容全体が「真の哲学史」[7]、哲学の内的歴史であるわけではない。哲学史の順序から言えば、東洋哲学が哲学史の始まりをなすが、東洋哲学が哲学史から除外さるべきことについては一節が設けられ[8]、またギリシャ哲学そのものについても、タレースやピュタゴラスの思想はまだ純粋な思惟の境地で真理を把えていないとして哲学（史）の端初をなさず、エレア派から「真の哲学史」は始まるとされるのである。

「真の哲学史」とヘーゲルが言うものは、最も簡単な形では、『講義』の結論で示されている八つの段階（ヘーゲル自身の哲学を入れれば九段階）の内、近代哲学については、既に、哲学史講義が実質的に完成されていたイェーナ後期の主著『精神現象学』の「絶対知」の章に於いてほぼ同様の趣旨で論じられているが、『精神現象学』の中で哲学史はどう位置づけられるのかは別の問題である。通常的自然的歴史と論理との対応関係が恐らく焦点となるのであろうが触れることは出来ない。このような「真の哲学史」と哲学（論理）とが相即的に円環をなして端初に還帰することから『エンチュクロペディー』の末尾でアリストテレス『形而上学』が引用されている事情が理解され得

よう。

哲学史に於いても「真の哲学史」と自然的哲学史とが区別され得るとすれば、論理と歴史との照応という原則も哲学史の核心的部分に於いて貫徹され得るものであり、それも具体者発展の基本的過程に関して看取され得るものと言えよう。

註

(一)

(1) G. W. F. Hegel Werke in zwanzing Bänden ; *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie* (3 Bände),Suhrkamp Verlag 本文では『講義』、引用では VGP と略し、ローマ数字は巻数を表わす。翻訳は緒論部Einleitung については、ヘーゲル『哲学史序説』(武市健人訳、岩波文庫)、本文についてはヘーゲル全集『哲学史』(岩波書店) に原則として従い、翻訳からの引用は夫々『序論』、『哲学史』と略する。

(2) 『序論』P.23

(3) 『序論』P.15

(4) 『序論』同所、K.Rosenkranz ; *G. W. F. Hegels Leben*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1969, S. 201, 茅野良男「ヘーゲル の哲学史と歴史哲学」、『思想』555 号 (ヘーゲル特集号)、P.85

(二)

(1) VGP.I.S.29 (『序論』P.54)

(2) VGP.I.S.38 (『序論』P.65)

(3) VGP.I.S.35 (『序論』P.62)

(4) VGP.I.S.20 (『序論』P.39)

(5) G.W.F.Hegel ; *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, 1830, §86 Zusatz 2 同書からの引用は EPW と略し、翻訳は岩波文庫版に従う。

(6) EPW 第二版への序文

(7) VGP.I.S.37 (『序論』P.65)
(8) VGP.I.S.36 (『序論』P.63)

(II)

(1) VGP.I.S.32 (『序論』P.58)
(2) VGP.I.S.24 (『序論』P.49)
(3) VGP.I.S.44 (『序論』P.74) Vgl. G.W.F.Hegel; *Wissenschaft der Logik*, Felix Meiner Verlag, II S.585。以下『大論理学』からの引用は WL と略し、ローマ数字は巻数を示す。
(4) 中埜肇、「ヘーゲルの哲学史」、『講座哲学大系』第二巻、P.400
(5) VGP.I.S.17 (『序論』P.37)
(6) VGP.I.S.24 (『序論』P.49)
(7) VGP.I.S.115 (『序論』P. 172)
(8) VGP.I.S.46 (『序論』P.78)
(9) VGP.I.S.25 (『序論』P.50)
(10 EPW. § 18
(11) EPW. § 257 Zusatz
(12) EPW. § 258 Zusatz.
(13) 出口純夫、「ヘーゲルにおける時間」、『理想』460号. P.32
(14) EPW. § 258. Zusatz.
(15) B.Lakebrink; *Studien zur Metaphysik Hegels*, Verlag Rombach, S. 141
(16) G.W.F.Hegel; *Phänomenologie des Geistes*. Felix Meiner Verlag (Philosophische Bibliothek) S. 558
『精神現象学』からの引用は以下 PG と略す。
(17) VGP.I.S.39ff (『序論』P.67 以下)
(18) 武市氏は対自(向自)在を自覚態とされているが、真の自覚は即且対自在の段階に於いて成就される。
(19) bei sich には定訳がないため便宜上「傍自」とした。

(20) VGP.I.S.42 (『序論』P.73)
(21) VGP.I.S.47 (『序論』P.79)
(22) EPW. §24. Zusatz 2.

(四)

(1) VGP.I.S.52 (『序論』P.85)
(2) VGP.I.S.51 (『序論』同所)
(3) ibid.
(4) VGP.III. S. 456 (『哲学史』下巻の三 P. 202)

(五)

(1) VGP.I.S.42 (『序論』P. 71)
(2) WL.I.S.31
(3) VGP.I.S.49 (『序論』P.81)
(4) EPW.§17.
(5) VGP.I.S.57 (『序論』P.93) I.S.24 (『序論』P.44)
(6) EPW.§86 Zusatz 2

(六)

(1) WL.II S. 356
(2) VGP.III.S.455 (『哲学史』下巻の三、P. 201)
(3) EPW.§22. Zusatz.
(4) VGP I.S.123 f (『序論』P.184)
(5) VGP. I S. 128 (『序論』P.191)
(6) WL.I.S.68
(7) EPW §86 Zusatz 2 Vgl. VGP.I.S.18 (『序論』P.46)
(8) VGP.I.S.118ff (『序論』P.175 以下)
(9) PG.S.559ff.

(大学院学生)